ぎちっ…
ぎしっ…
ぎしぎしっ…

「く、うぅ……ひ、卑怯な手を使いおって……」
淫鬼と戦っていた華月ではあるが、相手の目的は斬鬼を倒すことではなかった。
気づけば淫鬼から発せられた特殊な媚毒が部屋中に満ちており、その刀が首を斬り落とすよりも早く、華月の全身へと媚毒が回ってしまう。
ぎゅっ…
ぎゅっ…
ぎゅっ…
結果、後一歩のところで満足に身体が動かせなくなった斬鬼は、触手に絡め取られ倒すべき相手に囚われてしまったのだった。
「どんな手を使っても勝てばいいんだよ。恨むなら俺じゃなく、お前が女だったってことを恨むんだな」

VIPルームの豪奢なベッドに仰向けに拘束される華月の視線の先には、勝ち誇った淫鬼の姿。

今すぐにでも真っ二つにしてしまいたいが、両手は無防備を晒すように触手により高く、両足は無様に大股を開いて拘束されてしまっている。

普段ならばすぐにでも引き千切れるが、凶悪な媚毒によって強制的に発情させられた今の身体では不可能。

ぎしっ…

ぎしっ…

ぎしっ…

それどころか、強烈な媚毒によって布地の下の乳突起は自然と硬く尖り、純白の下着も分泌する淫蜜にじっとりと湿っている。

「ど、どんなことをされても……わしは屈せぬぞ……!!んんぅ……必ずや、お主の首を斬ってみせる……!!」

しかし、それでも華月の敵意や闘争心は少しばかりも衰えはしない。

自らの身体に起こる淫らな変化に戸惑いこそすれ、眼前に迫る悪鬼を相手に怯むことなく殺意を向ける。

「アレだけ俺の攻撃を受けてまだそんなこと言えんのか。ならしっかりと可愛がってやらねぇとな」

ピラッ…
かぁ…

「なっ!? そ、それはわしの……!!」
淫鬼が手にするモノを見て、華月は目を見開いた。見覚えのある赤い刀身は、間違いなく幾多の戦いを共にした愛刀に他ならない。
ピラッ…
それが倒すべき敵の手に渡り、切っ先がまっすぐに恥部へと伸びていた。
「自分自身の武器で斬られるってのも面白いよなぁ。どんな気分だ？俺みたいな鬼に武器を取られるのはよ。クククッ!!」
「き、貴様、何を……や、やめよッ!!」
かぁ…
悪意に満ちた笑い。雌を発情させることに特化させた鬼の能力を持つ相手であり、自身の身体が狙いであろうことは華月にも理解できる。
しかし、己の欲望に正直な気分屋である淫鬼。サディストであるという情報に偽りがなければ、赤い刀身が斬鬼を斬り裂いてもおかしくはない。

「な、なっ……!? 何をしているのじゃッ!!」
近づく刀身が、華月の秘所を守る布地をペロンと持ち上げた。
年齢としては千歳を超える長寿の鬼ではあるが、その身は幼い少女そのもの。
瑞々しい白い肌が露出し、女性の聖域を守る下着が完全に淫鬼の目に晒された。
ピラッ。
かあ。。。
「クハハハハッ!! 生意気なこと言ってもマンコはしっかりと濡れてるみてぇじゃねぇか。あの斬鬼も発情したただの雌ってことだな」
「ば、馬鹿にするでないわ!! 貴様のようなクズの力で……んん、はぁ……わしを好きにできると思うなッ!!」
赤く火照る頬が更に濃く染まる。こんな最低の相手に恥部を見られている最悪の恥辱に、全身がカァっと熱くなるのを華月は感じた。
悔しい。けれども自分にできるのは叫ぶことしかできない。
囚われの斬鬼は敵である淫鬼へと、甘い喘ぎを漏らしながらも精一杯の反抗心を向ける。

ぱぁ!!
ぱぁ!
すりっ
すりすりっ♥
にゅ
ぶるるるっ

「ほほう、流石はあの斬鬼だ。こんな状況でも生意気な態度は変わらねぇんだな。ならこんなのはどうだ？」

「ひっ!?」

ツンと、鋭く冷たい感触が、露となる恥部へと触れた。下着越しではあるけれども直接触れているのではと思えるほどに、過剰なまでに発情させられた肢体は反応してしまう。

ぱっ!!

ぱっ!

すりっ

すりすりっ♡

にゅ

ぶるぶるっ

更に恐ろしいのは、華月のじっとりと濡れる秘裂を襲うのはもう一本の愛刀であるということ。

「き、貴様どこまで……んんぅ、ひゃぅっ!!」

触手の巻きついた赤い刀身。それは戦いを共にしていた相棒が完全に奪われてしまった証であるようだ。
強い敗北感。そして同時に襲うのは、敏感にさせられた全身からの強い快感。斬鬼は堪らずに甘い声を発してしまう。
「このまま大事な武器で真っ二つにしてやろうか？んん？」
「や、やめよ……そんな真似、許すわけが――ふぁっ……あぁ、んふぅ……あ、あぁっ……ひぅんッ!!」
ぱっ!!
ぱっ!
遊戯感覚での宣告に、ソクリとした死の恐怖が華月へと纏わりつく。
抵抗したくとも身体は動かず、いつでも生死を好きにできる淫鬼が持つ刀の切っ先に優しくいやらしく擦られる淫裂。
力を込めずにただなぞられるだけの遊び程度の行為だというのに、反射的に甘い声が漏れてしまう。
すりすりっ♥
すりすりっ♥
（こ、こんな相手に好きにされているというのに……なぜわしの身体は……あ、あそこから、甘い痺れがとまらぬ……）
自身の身体に起こる異変。それが目の前の鬼の能力であるのは理解しているが、感じたくもない強い心地よさに華月は戸惑う。

ばんっ!?
ビクーン!!
ずぷぷっ!!
ずりっ
ずりずりっ♥
にゅ
ぶるるっ